

小規模林業経営体の新規参入の経緯と実態

-大分県佐伯市を事例に-

森林政策学研究室 武藤周作

1. 背景・目的

近年、林業の新規就業者が増加しており、林業従事者数の下げ止まり、高齢化率の低下と若年者率の高まりの傾向が注目されている（平成 25 年度版森林林業白書）。2010 年の農林業センサスによると、林業経営体の総数は減少している中、林業作業を請負等で行う林業サービス事業体等の数は増加している。この林業サービス事業体等の 6 割以上は、個人経営体などの小規模な林業経営体が占めている。また、会社や森林組合の数が減少する一方で、個人経営体の数は 2 割程度増加しており（川崎、2013）、小規模な林業経営体の動向が注目されている。しかし、林業の請負作業事業等に新規参入した小規模林業経営体の参入の経緯や実態解明はなされていない。

そこで、本研究では、小規模林業経営体の請負事業への新規参入の経緯とその実態について把握することを目的とする。

2. 研究対象地と方法

研究対象地には大分県佐伯市を選択した。大分県では、個人経営体数が林業サービス事業体等の 85% を占め、2005 年から 2010 年の増加率は 45% と高い（2010 年農林業センサス組替集計）。また、佐伯市では近年素材生産量が増加しており、大分県内の市町村別に見ると素材生産量が最も多く、2012 年には 256,250 m³ 生産している（大分県、2012）。研究は、統計データの分析、佐伯広域森林組合の職員 2 名と同森林組合の請負作業班 4 班 6 名への対面調査により実施した。

3. 調査結果

1) 森林組合職員への対面調査

佐伯広域森林組合には、2014 年 12 月現在で森林整備センターの直営班の林産班 6 班 17 名と請負班の林産班 25 班 62 名、造林班 36 班 117 名が所属し

ている。2006 年と比較して、直営班の人数は 2 名増加しているのに対し、請負班の人数は 80 名増加している（川崎、2010）。佐伯広域森林組合の素材生産量は、2013 年に 70,205 m³ で、うち主伐によるものが 55,855 m³ である。そのうち請負による生産比率は約 75% である。

(2) 対面調査の結果

調査対象は、近年新規に設立された班や請負作業に転職したものがいる 4 班 6 名である（表 1）。

A 班は非法人で親子 3 名（父親、母親、子）で従事しており、主伐を中心に間伐や育林事業も行っている。B 班も非法人で親族 3 名で、主に除間伐で、搬出間伐や下刈りなど育林作業を行っている。C 班と D 班は法人で 3 名で従事しており、主伐と搬出間伐が主な事業である。

請負作業を始めた理由として、N 氏、O 氏、Q 氏の 3 名が、「働いた分だけ収入が得られる」ということを挙げた。また、N 氏は元々請負班として従事していた父親、O 氏は森林組合の元職員の父親と従事しており、P 氏は父親との約束で会社を引き継ぐなど、3 名とも父親の影響を受けている。O 氏は、いずれ独立して働くことを考えていたとのことである。R 氏は山が好きだったので、Q 氏に弟子入りしたということである。また、彼らの中に、今後森林組合の直接雇用で林業に従事したいというものはいなかった。

一方、今回調査した全ての班は、規模拡大を考慮しているが、現在予定はないということである。A 班は、機械や人員を増やし規模拡大を考えているが、雇用しても独立を希望して、継続して従事するものがないために難しいとのことである。B 班や C 班も、従業員を募集し規模拡大を考えているが、候補者がいない状況にある。D 班は、新規の機械の購入をする際に、人員を募集したいということであるが、請負単価変動のリスクが大きく、ふさわしい人材が

いないために難しいであろうということである。

表 1. 請負班への対面調査の結果

区分	A 班		B 班	C 班	D 班	
事業内容	主伐：792 m ³ 、搬出間伐：5.14 m ³ 、切り捨て間伐：10.95ha、下刈り、造林、シカ網、作業道		除間伐：搬出間伐 80ha (8:2)、下刈り、作業道	主伐：搬出間伐 4,000 m ³ (8:2)、作業道	主伐：搬出間伐 6,000~7,000 m ³ (7:3)、作業道	
基本人員数	3 名		3 名	3 名	3 名	
作業日数	約 25 日/月		約 25 日/月	約 25 日/月	23~26 日/月	
組合の請負作業以外の事業	建設会社等からの受託 (収入の 1 割程度)、果樹園の経営		自伐：300 m ³ 、	自伐：5ha (主伐・間伐同程度)、立木買い：5ha、米：18 俵	自伐 300 m ³	
	M 氏	N 氏	O 氏	P 氏	Q 氏	R 氏
年齢	62 歳	31 歳	43 歳	34 歳	55 歳	26 歳
前職	型枠大工	森林組合の製材工場職員	土木技術士→森林組合で臨時雇用として作業道の設計や監督	運送業雇用	運送業雇用 (自伐もしていた)	自衛隊→森林組合の製材工場の職員
就業時期	1990 年代	2010 年	2011 年	2008 年	2009 年	2014 年 5 月
年収	300~400 万円	300~400 万円	300~400 万円	300~400 万円	—	—

資料：対面調査より作成 (2014 年 10 月~11 月調査実施)

4. 考察

今回の研究で、佐伯広域森林組合では請負による素材生産量の増加や若年の新規就業者が増加していることが明らかになった。また、今回調査した新規参入の 5 名は、他業種からの転職である。しかし、親が林業をしていた、もしくは前職等で森林組合と以前より関係があったなど林業と何らかの関係があり、彼らの新規参入に影響を与えている。そして、「働いた分だけ収入が得られる」など働き方にメリットを感じて新規に参入したケースが多く見られた。

また、実態として、今回調査した新規参入した 5 人のうち 35 歳未満が 3 名と若年者が多く、彼らの多くは、請負という従事形態を積極的な選択肢として捉えており、森林組合の雇用労働者になりたいと思っているものはいなかった。しかし、立木買いや組合以外からの委託で生産を行っている例は少なかつたために、経営資金が十分でないこと、営業力に力を割かなくてもよいと考えていること、などが考えられる。

今後の展望や課題として、人材が確保できず規模拡大が難しいという声が多く聞かれた。林業に従事するものが多くなっているが、請負班で雇用されて長く従事することに対して消極的で、独立志向が高いためと考えられる。しかし、請負班で独立するメ

リットがある反面で、個人で労災保険に入る必要があるなど、請負班で雇用労働者にはない負担があることも課題の 1 つと言えるだろう。

参考・引用文献

- ・林野庁 (2014) 平成 25 年度版森林林業白書
- ・林野庁 Website 「林業労働力の動向」
(<http://www.rinya.maff.go.jp/j/routai/koyou/01.html> : 2014 年 11 月取得)
- ・農林水産省 (2005、2010 年) 「農林業センサス」、および組換集計
- ・川崎章恵 (2013) 「林業サービス事業体等の動向」 (興梠克久編著『日本の林業の構造の変化と林業経営体-2010 年林業センサス分析-』農林業統計協会) 225~244 頁
- ・大分県 (2014) 「大分県の木材需給と木材産業の現況 平成 24 年」
- ・川崎章恵 (2010) 『林業における一人親方の今日的な存在形態と労働政策の課題』、九州大学提出博士論文